

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520292

研究課題名（和文） 前漢書平話前集・後集の復元を通して見た全相平話

研究課題名（英文） Quanxiang Pinghua through restoration of Qian-Hanshu Pinghua part1, part2

研究代表者

大塚秀高（OTSUKA HIDETAKA）

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：30126007

研究成果の概要：

本研究は、内閣文庫に所蔵され、上図下文の形式により、元の至治年間に福建の書肆虞氏から出版されたと推定される、一般に「全相平話五種」と称される一連のテキストのうち、『前漢書平話続集』上中下三巻をとりあげ、これと、その後裔とみなせ、やはり上図下文の形式により福建の書肆から刊行された、ともに明の万暦刊本が名古屋の蓬左文庫に蔵される、『両漢開國中興伝誌』ならびに『全漢志伝』を比較対照させ、「全相平話」から「伝誌」・「志伝」への変遷の過程を明らかにし、併せて、現在は失われた、「続集」に先立つ『前漢書平話』の「前・後集」部分と、「続集」に続くと推定される「別集」、さらには『全相平話後漢書』のあらましを明らかにすることを目的としている。

上記目的を達成するため、まずに『前漢書平話続集』上中下三巻とこれに対応する『両漢開國中興伝誌』ならびに『全漢志伝』を対照させ、三者を一覧できる輯校本を作成し、まずその上巻部分を試行本として発表した。その後、上中下三巻全体につき輯校本を作成し、これを冊子の形式で公表した。輯校本作成の手順は下記の通りである。

- ① 上記三者の木版影印本をスキャナーでパソコンに取り込み、データベースを作成した。ただし、すべて漢字の文献であり、なおかつ通俗文学作品には普遍的に存在する多数の俗字の問題があり、日本国内で作成されたソフトを使用しても解読率があがらないことが予想されたため、データベースの作成については中国の業者に依頼することにした。
- ② こうして作成したデータベースであったが、資料が原本をそのまま写真撮影したものであったため、本ののどにあたる部分が十分判読できず、その部分の解読率が上がらなかったため、自ら名古屋の蓬左文庫におもむき、原本により目録調査し、自身入力することが必要となった。
- ③ こうして解読率を上げたデータベース三種を同一のページに対照してならべ、三者それぞれに筆者において句読点を加えるとともに、原本の誤字脱字、通仮字等につき厳密な校正を加えた。
- ④ 次に、これを当時非常勤講師をしていた東大中文の大学院の授業のテキストとして使用し、院生諸君と解読を行い、その精度を上げることに努めるとともに、三者の対応関係についての認識を深めた。

かくして、『前漢書平話続集』から『両漢開國中興伝誌』、『前漢書平話続集』から『全漢志伝』への改変の傾向、ならびに『全漢志伝』と『両漢開國中興伝誌』の相違のよってきたるゆえんを考察し、両者が『前漢書平話続集』を祖とする親子の関係にはなく、兄弟、あるいはいとこの関係にあることを明らかにすることができた。さらに、もうひとつの目的であった、続集に先行ないし引き続く部分の「全相平話」の様相についても、対応する『両漢開國中興伝誌』と『全漢志伝』の分量、ならびに両者の改変の傾向に照らし、先行する部分については、これまで斯界のおおかたの共通認識であった正集一集（正統の二集）ではなく、『前漢書平話前・後集』二集分であった蓋然性が高いことを明らかにした（前後統の三集）。また、現存する両者の万暦刊本を書誌学の立場から厳密に検討し、両者それぞれについて、現存の形で出版されるに至るまでに経た複数の出版の経緯につき、具体的に

論証した。

筆者の本研究とほぼ同時に、信州大学の氏岡真士氏が、海外に遺留している漢籍の調査において発見された、スペインのエスコリアル修道院所蔵の『漢書故事大全』による研究を発表された。『漢書故事大全』は残本であり、そのごく一部が現存しているにすぎないが、その現存している後漢部分を『両漢開國中興伝誌』・『全漢志伝』の対応する部分と対照させると、三者が極めて類似しており、共通の祖本があったことが強く推定された。筆者はそれこそがかって存在したはずの『全相平話後漢書』ではないかと考え、この作業仮説の正否を検証する作業にとりかかった。作業は先の『前漢書平話続集』と『両漢開國中興伝誌』・『全漢志伝』の輯校本作成と同様に進められた。すなわち、『両漢開國中興伝誌』・『全漢志伝』の後漢部分のデータベースを作成し、この対応する部分と『漢書故事大全』の残存部分を対照させ、同一ページに一覧できる輯校本とし、それに句読・校正などを加えたテキストを作成した。この輯校本作成の過程とその間の考察を通じ、先に推定した祖本は確かに存在しており、なおかつそれは『全相平話後漢書』とみなしてさしつかえない性格の文献であって、上記三文献はいずれもそれをそれぞれの方針により改変した作品である可能性が高いことを確認した。

最後に『前漢書平話続集』に対応する部分に先立つ『両漢開國中興伝誌』・『全漢志伝』のデータベースを作成し、これを並べた輯校本とし、これまでに得た両者の『前漢書平話続集』からの改変傾向に照らし、ありうべき『前漢書平話前・後集』の復元を同一ページに試みた。だが、苦心惨憺の復元作業の結果、個々のエピソードについては高い蓋然性で『前漢書平話前後集』における存否を指摘することは可能と判明したが、テキストそのものについては、おおかたの要求を満足させるレベルでの復元は困難なことがわかった。また続集に続く「別集」についても、その存否につき確言することは難しいことがわかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	1,200,000	360,000	1,560,000
20年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開國中興伝誌・漢書故事大全・輯校本

1. 研究開始当初の背景

内閣文庫所蔵の元刊本全相平話五種は、宋元にかけて、盛り場で語られていた歴史語り・講史にもとづくものであり、一見して、司馬遷の『史記』がその対象とする、最古の王朝たる殷王朝の滅亡と周王朝の興起から始め、少なくとも三国時代まで、間断なく王朝興亡の歴史を語るシリーズものであったと推定された。しかし、「春秋後集」はあっても「前集」は現存せず、「前漢書続集」はあるが、それに先行する「正集」はなく、前漢と三国をつなぐはずの後漢もなかったから、今は失われた作品が複数存在すると推定されてきた。前漢の歴史を語る『前漢書平話』については、既述のごとく「続集」のみが現存して

いるが、これに先行する作品が存在したであろうことは誰も否定することができないところであって、その項羽と劉邦の戦いを語ったと推定される作品は、一般には「前漢書平話正集」と称されてきた。しかし、先人の研究により、『前漢書平話続集』の明代バージョンであることが明らかになっている『全漢志伝』や『両漢開國中興伝誌』の、『前漢書平話続集』に対応する以前の部分が「正集」一集分とするにはにつかわしくないボリュームをもっていったこと、元代ならびに明代に刊行された、類書を主とするシリーズものの刊行物、たとえば『花関索伝』などが、前・後・続・別という形で連続出版されていることに鑑みれば、『前漢書平話』についても、「続

集」以前に「前集」と「後集」が存在し、以後には「別集」が存在したことが十分考えられる。この疑問は是非とも解決されねばならない。李氏朝鮮で出版された『訓世評話』に見える漢語教科書に関する記録から、『後漢書平話』の存在が推定されたから、筆者としてはその存在を確信している『後漢書平話』ではあるが、これとは別の証拠により、その存在を否定の余地なく明らかにしておきたい。これが、本研究開始当初の、本研究をめぐる最新の研究状況であり、筆者の立場であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、研究成果の概要でも述べたように、『前漢書平話続集』に先行して存在した作品が、はたして『前漢書平話正集』一集であったのか、はたまた「前集」・「後集」の二集分であったのか、さらに『前漢書平話続集』に続く「別集」が存在したのか、また前漢と三国をつなぐ後漢時代を語る『後漢書平話』が存在したのかを明らかにし、はたしてそれらが存在したなら、それらを可能であるならば文字レベルで、それが不可能であるなら話柄の連鎖のレベルで復元することになった。

3. 研究の方法

研究を開始した当初にあつては、元代の至治年間に福建の書肆虞氏から刊行された、盛り場の演芸講史にもとづく出版物、いわゆる「全相平話五種」のうち、漢代を対象とするものの明代における後裔としては、『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』の二作品が知られるのみであったが、研究を進めるうちに、このほかに、これまで遠く欧州の片隅の修道院にあつて、まったく研究者に知られるところとならなかった作品に『漢書故事大全』というものがあり、この隊列に加わるべきものだということが明らかになった。筆者はこの状況にすばやく対応し、『前漢書平話続集』と『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』を比較対照することにより、前者から後二者それぞれへの改変の傾向を把握し、この段階でえた知識をもとに、『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』の、『前漢書平話続集』に対応する以前の部分から、『前漢書平話前・後集』の復元を試みるという当初の目的のみならず、『漢書故事大全』の残存部分とこれに対応する『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』の後漢部分を比較対照することにより、三者共通の祖本と推定される『全相平話後漢書』の存否、ひいてはそのおおよその話柄の連鎖を復元するという新たな目標を設定し、これをも追及することとした。

このいずれの目的・目標にあつても、それぞれの比較対照の対象となる三者間の相違

を一目で確認できる資料の作成が欠かせない。そこで、まず『前漢書平話続集』と『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』を対照した輯校本、『漢書故事大全』と『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』を対照した輯校本を作成した。次にこの過程で明らかになった『前漢書平話続集』から『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』それぞれへの改変の傾向を逆用し、『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』から『前漢書平話前・後集』の復元を試みた。

4. 研究成果

元代の『前漢書平話続集』と、これに対応する明代の『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』の輯校本を作成し、『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』における、『前漢書平話続集』からの改変傾向を明らかにし、これを基準として『前漢書平話前・後集』の復元を試み、文字レベルでの復元は不可能であっても、話柄の連鎖のレベルでの復元は可能であることを明らかにした。また、『漢書故事大全』と『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』の対応部分の比較から、その存在につき、諸説かまびすしかった『全相平話後漢書』の存在を、『漢書故事大全』・『全漢志伝』・『両漢開國中興伝誌』の三者の祖本の存在という形で明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ①大塚秀高 前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開國中興伝誌輯校本(試行本)並びに研究日本・アジア研究 4 2007 79-118 査読有(上巻部分のみ)
- ②大塚秀高 全漢志伝・両漢開國中興伝誌・漢書故事輯校本(試行本)並びに研究序説日本・アジア研究 5 2008 25-81 査読有
- ③大塚秀高 前漢書平話続集の復元を通して見た全相平話 平成19年度研究成果報告書 2008 1-72 査読無
- ④大塚秀高 前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開國中興伝誌輯校本(試行本)並びに研究(「日本・アジア研究4」の再録)
- ⑤大塚秀高 全漢志伝・両漢開國中興伝誌・漢書故事輯校本(試行本)並びに研究序説(「日本・アジア研究5」の再録)
- ⑥大塚秀高 両漢開國中興伝誌・全漢志伝版本源流考(附図) 平成19年度研究成果報告書 2008 22-3 査読無(本報告書のために新たに執筆)
- ⑦大塚秀高 前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開國中興伝誌輯校本(試行本) 査読無(上中下三巻分、本報告のために上巻部分を修正し中下巻分を増補)

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大塚秀高 (OTSUKA HIDETAKA)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：30126007

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者